

## « Espèce de ... ! » の暴力性に関する考察

楊 鶴

### 1. はじめに

本研究は、フランス語の罵倒表現の一つである « espèce de N ! » のようなタイプを取り上げ、その意味構造と暴力性の考察を目的とする。罵りとは、「口汚く悪口を言う」（『大辞泉』）ことであり、面と向かって相手を罵る場合（罵倒）や聞き手とは別の対象を罵る場合（陰口）がある。これらの罵倒行為を表す言葉には、あざけり、貶め、卑し、からかい、脅し、軽蔑、蔑みなどがあり、川崎（2003）はこれらを「悪態」と呼んでいる。

フランス語にも罵り表現を表す用語は多数存在する<sup>1</sup>。それらは、フランス語では *insulte* という概念でくくることができる。さらに区別すると、*juron* と *injure* のタイプに分けることができる。

*Juron* は、相手には向かわず、話者自身の憤懣や激高、ストレスなどの心的状態に向かい、「心の負担を軽くする」役割がある<sup>2</sup>（Rouayrenc 1998）。つまり、ある事態に対する話者の心的反応といえる（*merde*<sup>3</sup>, *putain*, etc.）。例えば « *merde* » のような語彙は「糞」という指示的意味があるが、内包的意味として、「汚らしいもの、つまり避けるべきもの」というマイナス価値を持つ。話者は、本来は避けたいが、避けられなかった事態に置かれた際、その反応として、この語を発する。いわば間投詞（*interjection*）として機能している。さらに、その事態に対話の相手が絡んでいれば、相手に向かって発する罵り表現となる場合もある。

*Injure* は、対話の相手に向かい、相手の価値を貶め、相手の反応と行動を促すことで罵り行為が成立する<sup>4</sup>（Rouayrenc 1998）。つまり、これらの罵り表現は対話者の存在を必要とし、相手に向かって発話される（*connard*, *salaud*, etc.）。相手の欠点やコンプレックスを意図的にあげつらうことで、相手に「マヌケ」「ウスノロ」というレッテル貼り、軽蔑、批判などのマイナス評価を与える。例えば、« *connard !* » と罵った場合、罵り対象を「マヌケ」「ウスノロ」として捉えると同時に「マヌケ」「ウスノロ」というレッテルを貼りつけていると考えることができる。そうすることで、話者が持つ軽蔑、批判、からかい、差別などのマイナス評価を相手にぶつけることができる。このような罵り表現は相手を必要として相手に向かって発話している。

*Merde !* のような *juron* 型を「対・事態的」とするならば、*connard !* のような *injure* 型は「対・

<sup>1</sup> 他には、*Insulte*, *injure*, *invective*, *apostrophe*, *vanne*, *juron*, *blasphème*, *gros mots*, *incivilité*, *outrage*, *formule*, *axiologique négatif* (Lagorgette 2004) がある。

<sup>2</sup> Le juron en effet nous sert « soulager notre cœur » et peut ne même pas être considéré comme une énonciation lorsque, dans le cas du juron réflexe, il ne sert pas à communiquer. Le juron, lui, en principe, n'est pas formulé à l'adresse d'un destinataire, du moins direct. (Rouayrenc 1998, p.109-110)

<sup>3</sup> 事態に対する話者の心的反応に関しては、例えば、食事中に飲み物をこぼした際、「*merde excusez-moi* » (ESLO2\_ENT\_1260) と反応し発話する場合、または、何か美しいものを目にした際、「*merde que c'est beau* » (Lagorgette 2004, p.6) のように、ある事態に対しての良し悪しの評価をする場合が挙げられる。

<sup>4</sup> L' *injure* implique un destinataire (qui peut évidemment être parfois le destinataire), que l'on veut provoquer ou surprendre, qui est contraint par là à réagir et dont la réaction peut être très variable. (Rouayrenc 1998, p.109-110)

対話者的」とすることができる。本研究で取り上げる «*espèce de ... !*» は、ある事態において、相手に向かって罵るため、*injure* 型であり、すなわち「対・対話者的」の蔑み表現であると考えることができる。

## 2. 問題提起

本研究で扱う «*espèce de ... !*» は、以下のように使用することができる。

(1) *Espèce de morue !* (このあばずれめ!) (Dictionnaire des injures)

(2) *Espèce de connard !* (このバカ!) (Comme les autres)

(1) の *morue* は魚のタラであるが、俗語では、普段の行いが良くない女性、売春婦の意味に使われるため、そのような女性に対して罵ることができる。(2) では、浮気をした夫に対する妻の発話である。用例からわかるように、「*espèce de ... !*» は、*merde ! putain !* のように、事態に対して憤慨するのではなく、事態の中において「罵倒者 ⇔ 聞き手」の関係にあり、相手に対しての罵りである。

これまで、「*Espèce de ... !*» に関する研究はいくつかなされてきた。Edouard (1967) によれば、「*espèce de ... !*» は分類やクラス分けを必要とし (*besoin de cataloguer*)、発話をすることで相手をあるカテゴリーに属させるが、そのカテゴリーの中でも正式なものではなく、一つの異種、またはバリエーションとして捉えることができる。以下に引用する。

Quand on lance à quelqu'un : « *Espèce de cornichon, Espèce de poire, Espèce de patate, Espèce de chose ou de machin...* » cela équivaut à lui dire : « Tu n'es pas le Cornichon, la Poire, la Patate, la Chose ou le Machin par excellence, tu n'en es qu'une variété ! »

(Edouard 1967, p.424)

また、Rouayrenc (1998) では、「*espèce*» は単独で用いられる名詞ではなく、常に «*de*» を伴い、前置詞句 «*espèce de*» という形で使用されるものであると指摘している。また、前置詞 *de* に後続する名詞は、動物・果物の名前、加えて、タブーとされている言葉や罵り名詞も後続させることができると述べている<sup>5</sup>。さらにもう一つ重要な点としては、「*espèce*» という語自体はマイナス価値を持たないが、罵りを導入する役割があると指摘している点である。以下に引用する。

<sup>5</sup> *Espèce* ne peut être suivi que d'un syntagme prépositionnel : c'est toujours *espèce de*. Le nom qui suit peut être, comme après *face*, un nom d'animal à valeur métaphorique ou un nom employé par ailleurs métaphoriquement avec une valeur injurieuse : *espèce de dinde, de chameau ; espèce de cornichon, de patate, de ballot, de chiffon molle, de cloche*. *Espèce de* est en effet souvent suivi d'un terme tabou et/ou injurieux en soi, nom : *espèce de con, de couillon, d'andouille, de jean-foutre, de sans-couilles ; adjectif ou participe employé comme nom : espèce d'idiot, de minable, de bouseux, d'impuissant ; espèce de dégonflé, espèce d'enclulé, espèce d'enfoiré*. (Rouayrenc 1998, p.99-100)

Certains termes, qui en eux-mêmes ne sont nullement des gros mots, fonctionnent comme introducteurs de l'injure ; c'est le cas de *face* ou *espèce*.

(Rouayrenc 1998, p.99)

以上からわかるように、これまで « *espèce de ... !* » の用例の記述、名詞句としての句構造に関する考察はなされてきたものの、「対・対話者の罵り表現」としての意味構造と発話機能という視点からの研究は行われていない。

本研究では、Edouard (1967) が指摘している「 « *espèce de N !* » は、N というカテゴリーを作り出し、対象をそのカテゴリー内の「バリエーション」として捉える」という考え方をもとに、なぜ悪質な意味合いを持たない « *espèce* » が、« *espèce de ... !* » の形で現れた際、罵り表現として成立するのかをより詳しく考察する。

### 3. 分析

« *Espèce de ... !* » を分析するにあたり、「留保マーカ<sup>6</sup>の意味構造との関連」、「無冠詞名詞句との関連」の2つの視点から考察する。

#### 3.1. 留保マーカと « *espèce de ... !* »

留保マーカについては、渡邊 (2010) の研究を参照する。渡邊 (2010) によれば、*Je gagne environ 3500 francs par mois.* (わたしは月収およそ 3500 フランです。) のような場合、*environ* は「それによってみちびかれる辞項が近似的であることを明示しているといえる。このような近似性を明示するマーカのことを『留保マーカ』 (*enclosures*) とよぶ」としている。

« *Espèce* » は「種類」を意味し、« *un / une espèce de ...* » 「ある一種の～」の形で使用することができ、上記で述べた「留保マーカ」にあたり (Tamba1991、渡邊 2010)、« *une espèce de* » に後続する事柄が近似的であることを示している。(C'est *une espèce de journaliste.* 記者のようなもの。<sup>7</sup>『ロワイヤル仏和中辞典』)。つまり、説明や描写が困難な物事に対して、「～のようなもの」といった具合で、物事の説明に使われる<sup>8</sup>。同様の意味合いを持つ留保マーカで « *une sorte de ...* », « *un genre de ...* », « *un type de ...* » などが挙げられる。これらの中で、無冠詞で使用され、罵り表現として成立するのは « *espèce de ... !* » のみである (« *\*sorte de N !* »)。

以下で、« *une espèce de N* » と « *une sorte de N* » を取り上げ、近似表現としての意味構造を比較する。それを踏まえて、« *une espèce de N* » が持つ意味構造の特徴と罵り表現としての « *espèce de ... !* » のつながりについての考察が可能となると思われる。

まず、« *une sorte de N* » について考察する。Rosier (2002) は近似性について「正確さにふれな

<sup>6</sup> 「留保マーカ」とは、それが導入する辞項が近似的であることを明示するマーカである。(渡邊 2010)

<sup>7</sup> 日本語訳は筆者が付け加えたもの。

<sup>8</sup> *Une/un espèce de ... une personne, une chose difficile à décrire et que l'on assimile à une autre qui lui capable. (Le dictionnaire de votre temps 1991)*

い」とし<sup>9</sup>、質的、または量的に説明をしているリストを挙げており、以下のような記述がある。

Les enclosures : une sorte de, une espèce de connaissent la même ambivalence : ils peuvent conforter mais aussi simplement s’approcher d’une catégorie. Wilmet (1998 : 299) propose comme paraphrase d’une sorte de martien : un martien qui n’en est pas tout à fait un.

(Rosier 2002)

Rosier (2002) は、*une sorte de, une espèce de* を *les enclosures*、つまり留保マーカ (渡邊 2010) として捉えている。引用の中の Wilmet (1998) の用例を考察すると、「*une sorte de ...*」を用いることで、対象である *martien* (火星人) は完全に *martien* と呼べるものではなく、それに似たようなものとして取り上げられている。したがって、A, c’est une sorte de B と発話した場合、A というものは B ではないが、形が似ていたり、B の特徴が備わっているものと解釈することができる。

(3) JSM : c’est quelque chose qui est

JSM : ressemble à je sais pas une sorte de crêpe

(ESLO1\_MAG\_630)

(4) YI60 : à part la danse est-ce que tu fais d’autres sports parce qu’on pourrait considérer la danse comme une sorte de sport

(ESLO2\_ENT\_1060)

(3) では、JSM がユダヤのお菓子を探しているが見つからず、店員に「クレープのようなもの」と伝え、お菓子の説明をしている。探しているお菓子はクレープではないが、クレープの特徴をいくつかシェアしており、それに似たものとして取り上げている。このように、物事を定義づける際に近似表現を使用することができる (Martin 1983<sup>10</sup>, Rosier 2002)。

それに対して、(4) では、ダンスをスポーツの一種として取り上げられている。スポーツはダンスの上位カテゴリーに位置すると考えることができ、Rosier (2002) によるところの「上位カテゴリータイプ (type hyperonyme)」に当てはまる。したがって、(4) のように、「*une sorte de*」は分類上の上位と下位の関係に関連付けることができる。Rosier (2002) では、この上位カテゴリーの概念は「*une espèce de*」や「*un genre de*」に適用されない<sup>11</sup>とも記載しているが、この点に関してはさらなる検証が必要である。本稿ではふれないことにする。

続いて、「*une espèce de ...*」について考察する。「*Une espèce de N*」は、少なくとも2つの解

<sup>9</sup> Être approximatif, c’est ne pas toucher juste. C’est pratiquer l’à peu près. (Rosier 2002)

<sup>10</sup> La définition par approximation est une commodité où le lexicographe fait usage d’indicateurs du type « sorte de », « espèce de » (Martin 1983)

<sup>11</sup> La définition par inclusion dans une catégorie englobante (type hyperonyme) : un tramway = une sorte de moyen de transport. Cette acception n’est pas possible avec *espèce* et *genre* dans les enclosures. (Rosier 2002)

積ができる。第一に、「*espèce*」が分類学的に解釈される場合である。(5)のように、*morue* (タラ)は *poisson* (魚)であり、さらにその一種として説明されている。

(5) *La morue, c'est une espèce de poisson.* (タラは魚の一種である。)

第二の解釈は、次の例 (6)~(8)のように規範的基準に対して、変種・変異を表す場合である。

(6) FZ61 : un espèce de langage français bien sûr mais très très patoisant

(ESLO1\_ENT\_072)

(7) HF8 : i- ils connaissaient même pas euh l- l- la langue de leurs parents ils parlaient un espèce de français déformé

(ESLO2\_ENT\_1008)

(8) ZF4 : mon dernier fils qui a qui été au collège Dunois il il parle un espèce de langage avec ses amis euh mi-verlan euh

(ESLO2\_ENT\_1004)

(6) では、フランス語はフランス語でもなまりのあるフランス語、(7) は変形したフランス語、(8) は *verlan* のような言葉を指す。いずれも標準的フランス語に対して多様な種類が話題となっている。「フランス語」の現れ方を問題にするのならば、例えば、フランス語の中でも、アナウンサーが話すフランス語、教師が話すフランス語 (いわゆる良いフランス語) などであれば、第一の分類学的解釈を受ける。反対に、標準的フランス語という基準に対して、なまりのあるフランス語、古いフランス語、不良が話すフランス語 (いわゆる悪いフランス語) などのバリエーションが問題になる場合は、第二の解釈である規範的基準に対する変種、変異として解釈することができる。

ここで、罵り表現とのつながりを考えてみたい。例えば、「*espèce de fils de pute !*」という表現は、聞き手を「売春婦の息子」の一種として分類しているのでもなければ、「売春婦の息子」という規範や基準に対しての変種でもない。どちらの解釈にも当てはまらない。この表現は、聞き手が「売春婦の息子！」と罵られるほどに、ひどい人だという解釈をすることができる。つまり、「*espèce de*」は、話者の主観的価値を表すものであり、「軽蔑語の前では形容詞的にそれを強調し、*accompli, fieffé* の意に近づく」(朝倉 2002, p.201) と指摘されるものである。「*Espèce de*」は、強調表現として捉えることができるが、なぜ常に罵りのマイナス価値を持つことになるのか、次で考察する。

### 3.2. 対他者的 « *espèce de ... !* »

罵り表現としての « *espèce de ... !* » は必ず罵られる人物を必要とする。その罵り対象は話者が罵る前から標的を定めており、特定の相手である場合が多い。

(9)=(2) La cliente : Salaud... C'est ça, ouais, casse-toi ! Va retrouver ta pute, *espèce de connard* !

(Comme les autres)

(10) José : C'est lui ?

Philippe acquiesce.

José : *Espèce de petite salope* ! Tu m'as donné à Kader !!!

(Toril)

(11) Vincent (fils) a ouvert la lettre de son père, il ne peut plus cacher la lettre.

Hervé (père) la découvre et relâche aussitôt Vincent qui retombe sèchement au sol.

Hervé : *Espèce de pauvre con* va !

(Compte tes blessures)

(9)=(2) は、浮気をした夫に対し妻が罵る発話である。(10) では、José は麻薬の密売をしているが密告され、密告者に対する罵りである。(11) では、自分の手紙を勝手に開けてしまった息子に対して罵る発話である。それぞれの用例において、「夫の浮気という行動」、「密告という行動」、「手紙の無断開封という行動」が罵り発言を引き起こしている。いずれも面と向かっての対話であるため、話者は明確な標的を持ち、その標的に向かって直接的に怒りをぶつけている。

それぞれ « espèce de ... » に後続する言葉は、「connard」、「petite salope」、「pauvre con」であり、いずれも « gros mots » (汚い言葉) である。この場合、汚い言葉のみを浴びせかけても相手に対する罵りは成立するが、「espèce de ...」は、そのマイナス価値の程度をさらに強化する。「Espèce de connard」は、「espèce de」を付け加えることによって、「connard」が持つマイナス価値のさまざまなグラデーション(程度)を作り出す。言い換えれば、「espèce de」があることで、「少し悪い connard」、「普通の connard」、「すごく悪い connard」のように、connard の悪さの程度を表示させることができる。そして、このようなグラデーションを作り出している « connard » 自体が最も酷い価値を持つ。なぜなら、どのグラデーションによって作られた connard も、基となる « connard » の悪さにはかなわないからである。その意味で、「espèce de N !」は、もっとも悪い意味合いを持った言葉を相手に浴びさせるため、罵り相手に対する攻撃性・暴力性がかなり強い表現であるといえる。

実際に « espèce de ! » は、浮気、告発、尋問といった相手の行動を激しく非難、軽蔑するような、日常生活ではあまりみない修羅場、悲惨な状況という特殊な場面において使用されることが多い。このような場面において、話者は相手の行動が許せず、怒りが頂点達しているという心情もうかがえる。

« Espèce de » に後続する名詞は « connard » のように、語彙的にマイナス価値を持つ俗語的な名詞が多い。しかし、「espèce de」は文脈によっては、名詞にマイナス価値を付与する場合がある。いわば、元来はマイナス価値を持たない名詞でも罵り表現となりうる。例えば、以下のような用例が挙げられる。

(11) *Espèce de journaliste !* (ブンヤ野郎！)

(11) の *journaliste* (新聞記者) は職業名を表す名詞だが、社会的に貶めた価値を持たせれば、許しがたいブンヤ (新聞記者) として理解される<sup>12</sup>。

#### 4. 無冠詞名詞句と « *espèce de ... !* »

以上では « *espèce de ...* » が相手に向かって、かなり攻撃的な表現であることを検討してきた。「*Espèce de*」のもう一つの特徴として、無冠詞名詞句であることが挙げられる。以下では、無冠詞名詞との関連性を考える。

Fisher (2004) では、「*espèce de ... !*」は « *une espèce d'idiot !* » の不定冠詞を削除することで罵り感情を持った感嘆文を作ることができると指摘している。

En effaçant le déterminant pour construire l'injonction, l'exclamative est là : *Espèce d'idiot !*

(Fisher 2004, p.53)

フランス語の名詞は常に冠詞を伴い使用され、名詞のみでの発話は不自然となる。しかし、特殊な場面において、無冠詞での使用が可能になる。ここで、無冠詞名詞の「呼称機能」と「表示機能」を取り上げ、罵り表現としての « *espèce de ... !* » とのつながりを考察する。

(12)=(2)=(9) La cliente : *Salaud... C'est ça, ouais, casse-toi ! Va retrouver ta pute, espèce de connard !*

(*Comme les autres*)

無冠詞名詞の呼称機能として、目の前にいる人を呼んだり、話し相手の注意を引く (川口 2015) などが挙げられる。呼称をもって相手を呼ぶことで、何らの介入のない、相手との直接的な関係が成り立つ。(12) の « *espèce de connard !* » は、相手を呼ぶというよりは、同じ現場に居合わせた「夫」の許しがたい「浮気」という行動に反応し、直接罵ることで、話者は相手と直接的な関係を築いている。相手に向かって直接的に働きかける (罵倒を浴びせる) という点では、無冠詞名詞の呼称機能に近いものがあるといえる。

無冠詞名詞の表示機能に関しては、例えば、商店に並ぶ商品の表示、価格表示、駐車禁止の看板、動物園の動物名の表示など、このような掲示は一般的に無冠詞である。つまり、「対象」と「名称」の間に直接的な関係が成り立ち、「対象物にあるラベルを貼る」と考えることができる。(12) の « *Espèce de connard !* » は、相手に向かって直接的に働きかけると同時に、相手に « *Espèce de connard* » というレッテルを貼り付けて罵るため、表示機能が働いていると思われる。つまり「夫

<sup>12</sup> Il a parfois, pas toujours, un sens dépréciatif devant un nom de profession : *Une espèce d'avocat.* (*Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne* 1983)

＝愚か者」というように両者を結び付けている。「浮気」という酷い行動は気品がないものであり、それをしてしまった夫の品格に対してレッテルを貼り付け、相手に対するマイナス価値を提示している。

« Espèce de N ! » は、特定の相手と対話の場を共有し、その場で直接罵ることで、相手と直接的な対人関係を結びつける。また、相手に「バカ」というレッテルを一方的に貼りつけることで、より強い罵りを成立させている。

#### 4. まとめ

本研究では、罵り表現としての « espèce de... ! » の暴力性を、留保マーカの意味構造、無冠詞名詞の呼称・表示機能と関連付けながら考察した。「対・対話者的」な罵り表現であり、相手の酷い行動に対して話者が反応し、強い罵り表現として発せられる。

« Espèce de connard ! » は、espèce de が導入されることで、connard が持つマイナス価値のさまざまな程度を作り出し、そのグラデーションを作り出す基となる connard 自体が、最低評価の connard であると解釈することができる。そのため、相手を徹底的なひどいやつとして取り上げ、「あなたほどのひどいバカは見たことない」というように、より強い罵りのマイナス価値が表れている。また、「espèce de N !」は相手に対して直接罵るため、無冠詞名詞の呼称機能に近いところがあり、相手との直接的な対人関係を築いている。さらに、相手に « espèce de N ! » というレッテルを貼ることで無冠詞名詞の表示機能が働き、相手の品格のない行動に対してさらに悪い評価を提示しているため、かなり強い罵倒表現として成り立つ。以上を踏まえ、「espèce de ... !」はある特定の場面、特定の人物に向けられ、強い罵倒表現としての機能を果たしている。

本研究では、「espèce de ... !」に汚い言葉が後続する用例のみを検証した。その他に、例えば « espèce de cornichon ! » では、cornichon は汚い言葉ではなく、俗語として比喩的に使用した場合悪質な意味合いが生じる。今後の課題として、「espèce de ... !」の後に続く名詞句の性質についても研究を進めていく必要がある。また、journaliste のようなマイナス価値を持たない名詞が後続しても悪い評価として捉えられる用例が観察されたため、「espèce de ... !」が後続する名詞に及ぼす影響も考察対象としていきたい。

#### 参考文献

- Anscombre, J.-C. (1985a) : « Onomatopées, délocutivité et autres blablas », *Revue romane* 20, pp.169-207.
- Anscombre, J.-C. (1985b) : « De l'énonciation au lexique : mention, citativité, délocutivité », *Langages* 80, pp.9-34.
- Edouard, R. (1967) : *Dictionnaire des insultes, précédé d'un petit traité d'injurologie*, Tchou.
- Fisher, S. (2004) : *L'insulte : la parole et le geste*, *Langue française*, 114, pp. 49-58.
- Hanse, J. (1983) : *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*, Duculot.
- Kerbrat-Orecchioni, C. (1980) : *L'énonciation - de la subjectivité dans le langage -*, Armand Colin.
- Lagorgette, D. (2004) : « Introduction », *Langue française* 144, pp.3-12.
- Labov, W (1978) : *Le Parler ordinaire*, Les éditions de Minuit.

- Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- Moingeon, M & Berthelot, J. (1991) : *Le dictionnaire de votre temps*, Hachette.
- Tamba, I. (1991) : « Un clé pour différencier deux types d'interprétation figurée, métaphorique et métonymique », *Langue française*, 101, pp.26-34.
- Rosier, L. (2002) : « Des « profileurs » de l'énonciation : les constructions avec *genre*, *sorte* et *espèce* », *Revue des linguistes de l'université Paris X Nanterre, Comme la lettre dit la vie, Linx*, pp.1-11.
- Rouayrenc, C. (1998) : *Les gros mots*, Presses universitaires de France, Que sais-je.
- 朝倉季雄 (2002) : 『新フランス文法事典』 白水社
- 川口順二 (2015) : 「呼びかけとモダリティ」『フランス語学の最前線 3 特集モダリティ』 ひつじ書房 pp.359-401.
- 川崎洋 (1997) 『かがやく日本語の悪態』 草思社
- 田村毅、恒川邦夫、春木仁孝、倉方秀憲、吉田城 (2005) : 『ロワイヤル仏和中辞典』 旺文社
- 渡邊淳也 (2010) 「フランス語および日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究・言語篇』 58 pp.55-74.

(よう つる / 文芸言語専攻5年)